

T. ヴェブレンの製作本能論と産業技術¹⁾

高橋 宏 幸

1. はしがき

本稿の目的は、ソースタイン・ヴェブレン (Thorstein B. Veblen, 1857-1929) が製作本能 (the instinct of workmanship)²⁾ とその自己汚染 (self-contamination) の同時的発現により産業技術の発展について論じていることを明らかにする点にある。

ヴェブレンは、19世紀末から20世紀初頭の独占段階に突入したアメリカ資本主義社会を分析対象とした。それを分析可能とする新たな経済学の構築を試みた。その過程で、既存の経済学が非現実的な受動的人間像に基づいて構築されていることを厳しく批判した (Veblen 1899a, 1899b, 1900, 宇沢 2000, 塚本 1979, 1983, 1994)。

そこでヴェブレンは、新しい経済学の構築のために、人間がどのように行動するのかを根本から捉え直し、新しい人間像を独自に構築した。ヴェブレンは、人間が本来持つ特性である「製作本能」と、社会で人間が持つ習慣化された物事の考え方、つまり「思考習慣」を提示した。ヴェブレンは社会に広く行き渡っている「思考習慣」を「制度」と呼んだ³⁾。ヴェブレンは、人間が製作本能の特性を発揮しながら制度との相互作用の中で行動する、と捉えた。そのうえでヴェブレンは、制度との相互作用の中で「製作本能」の導く人間行動がいかに関「産業技術」を発展させ、その過程で制度が累積的に進化するかを究明した。ヴェブレンにとって、産業技術の発展を通じた制度の進化が社会の発展である⁴⁾。こうした制度の進化過程⁵⁾を究明したのが、ヴェブレンの「進化論的経済学」(evolutionary economics)であった⁶⁾。

かくしてヴェブレンは、独占段階にあるアメリカ資本主義体制はどのような制度進化の過程を経て生

1) 本稿は、高橋 (2011) の一部を大幅に加筆・修正したものである。また、本稿を掲載する際、査読いただいた先生には大変有意義なご指摘とご助言を頂戴した。この場を借りて御礼申し上げたい。もちろん、本稿における内容についてのすべての責任は私自身にあることは言うまでもない。

2) ヴェブレンは、製作本能を様々な用語で表現している。ヴェブレンは製作本能を、製作本能 (the instinct of workmanship)、製作の本能的感覚 (the instinctive sense of workmanship)、製作の感覚 (the sense of workmanship)、製作の本能的性癖 (the instinctive propensity of workmanship) などと呼んでいる。さらに単に製作 (workmanship) と表現する場合もある。製作に関しては、単に「物を作る」という意味でも用いている箇所もある。

3) ヴェブレンは、その著『有閑階級の理論』で、「制度とは、実質的に言えば、個人や社会の特定の関係や特定の機能に関する広く行きわたった思考習慣なのである」と、述べている (Veblen 1899 [1965], 190 / 小原訳 183-184, 高訳 190)。

なお、本稿で、小原訳と高訳の両方を記載した場合、基本的には高訳を参考にした。しかし、訳は必ずしも訳書に依っていない場合もある。それは、その他の邦訳書でも同様であることをここで断っておく。

4) ヴェブレンは、その著『有閑階級の理論』で、「制度の発展が、社会の発展である」(Veblen 1899 [1965], 190 / 小原訳 183, 高訳 190) と、述べている。

5) ヴェブレンの製作本能による制度進化の過程については、高橋 (2010, 2012) を参照されたい。

6) ヴェブレンは、「経済学はなぜ進化論的科学的でないのか」(Veblen 1898) において、「進化論的経済学」を提唱した。

成したかを追跡する。ヴェブレンはその萌芽が「手工業の時代」⁷⁾にあるとする⁸⁾。それゆえ、その手工業の時代においてどのように「産業技術」が発展したのかを究明することは、ヴェブレンのアメリカ資本主義体制論を解明する鍵となるといえよう。

そこで「産業技術」の発展に関する議論で重要となるのが、ヴェブレンの「製作本能」の概念である。というのも、製作本能は産業技術に関わる本能だからである。製作本能は、「有用性や効率性を高く評価し、不毛性、浪費すなわち無能さを低く評価するという感覚」(Veblen 1899 [1965], 15 / 小原訳 26, 高訳 26) であるため、何が有用かを考え目的の達成を効率的に遂行させる本能である。それゆえ、「製作本能は、実際的な工夫、方法と手段、効率と節約に関する方策と計画、熟練、創造的な仕事、そして事実についての技術的な精通と関わりを持つ」(Veblen 1914, 33 / 訳 28)。こうした特性を有するため製作本能は、手近にある物質や素材そのものを効率的に利用するように導く。この点で製作本能は、事物の「事実に即した」(matter-of-fact) 理解を促進する契機を与える。それが産業技術の発展に繋がる。この発現の仕方が、製作本能の本来の発現形態である。

しかし、製作本能は自己汚染する。製作本能の自己汚染は、事物を目的論的な人間行為に擬えて理解することである。それは、「転嫁」(imputation) に関わる理解である。ヴェブレンはそれを、アニミズムや擬人論と呼ぶ。この「転嫁」に関わる理解は、事物そのものを物質的素材、つまり事実に即して理解することを妨害する。制度が略奪的であれば、製作本能は、その自己汚染を通じて、事物の理解に略奪的制度を体現させる。製作本能は、この自己汚染を通じて「略奪本能」(the predatory instinct) となる。それゆえ、製作本能の自己汚染、つまり製作本能の自己汚染形態としての略奪本能は、それ自体、「転嫁」に関わる理解を導くため、産業技術の発展に何ら役に立たないことになる⁹⁾。

製作本能はそれ自体、こうした対立・矛盾する特性を併せ持ち、それらを同時に発現する。産業技術の発展は、こうした製作本能とその自己汚染の同時的発現がその時々との相互作用でどのように発現するか左右される¹⁰⁾。

このようにヴェブレン経済学は製作本能が導く産業技術の発展とそれによる制度進化を究明したものである。それゆえこれまで、製作本能の概念や、それによる産業技術の発展と制度の進化過程に関する

7) ヴェブレンが提示する制度の歴史発展段階ないし時代区分に関する表現は多様である。この時代区分については、佐々木 (1998, 177-178) および佐々野 (1982, 157) も参照されたい。

8) 佐々野は、次のように述べている。「ヴェブレンによれば、農民を根底に支配と奉仕の確固とした身分制社会である封建主義体制のすきまをぬって発生した『手工業・小規模商業時代』が、近代資本主義の歴史の出発点をなす。すなわち、手工業が資本主義制度の歴史的基礎なのである」(佐々野 1982, 143)。

9) ヴェブレンは、原始未開社会およびその後の動植物の世話や農業においては、製作本能の自己汚染は、その発展に役立ったと述べている。「諸事実を人間性の諸要素に転嫁させることによって、色づけし、歪め、攪乱するような本能的偏倚はすべて、不可避的に、行為者と機械的構想の有効な追求から妨げ、横へそらせるように作用するであろう。しかしながら、人間が生物界と関わる場合には、同様のことは、同じ程度には当てはまらない。そこでは擬人論的解釈がより馴染みやすく、それほど有害ではないのである。客観的な結果にそれほど深刻な攪乱を及ぼすことなしに、作物や動物は意識的な生活目的を持ち、何らかの人間のなやり方で目的を追求すると解釈される」(Veblen 1914, 73 / 訳 60)。

しかし、手工業など物質的な素材を扱う場合は、事物に人間行為を転嫁して理解することは役に立たない。ヴェブレンは、技術を成長させる「技術の効率は、外部の対象について知るさい、その対象に転嫁させた特性に関する理解とは対照的な、事実に即した理解に基づいている」(Veblen 1914, 58, 訳 48) と述べている。

ヴェブレンの本能論および製作本能論の展開については、高橋 (2009, 2010) を参照されたい。

10) ヴェブレンにおける制度進化論を、製作本能一元論の見地から論じたものとしては、佐々木 (1967) および佐藤 (2010) を参照されたい。

研究は、数多く提出されている（ex., Brette 2003, Cordes 2005, Edgell 1975, Gruchy 1967, Hodgson 2004, Rutherford 1984, Taka 2005, 小原 1965, 1966, 齋藤 2007, 佐々木 1991, 1995, 1998, 佐々野 1982, 2003, 佐藤 2010, 高 1996, 田中 2002）。しかしながら、これらの既存の研究では、製作本能とその自己汚染の同時的発現が、事物の「事実即した」理解の促進を通じて、どのように産業技術の発展に繋がったのかについて、十分に検討されていないように思われる。

これまでのこれらの既存の研究成果を踏まえれば、手工業の時代とその産業技術の発展についての議論は、次のようにまとめることができよう。

手工業時代は、独立した職人が中心的存在であった。職人は「技術」による「製作」と「金銭的管理」による「自助」の能力が求められた。この時代の後期には、親方職人や商人が資力のない職人を雇い入れた。親方職人は主に「金銭的管理」を、雇用された職人は「製作」を行った。「製作」と「金銭的管理」の両立が手工業を支えた。このように、製作本能の反映である「製作」を指向する制度たる「産業」と、製作本能の自己汚染ないし略奪本能の反映である「金銭的管理」を指向する制度たる「企業」は、産業技術の発展にとって有利な制度体系を作り出した。「産業」と「企業」の二つの制度の調和的ともいえる制度的状況が、社会全体に「製作」に有利な「生産的制度」を生み出した。それが産業技術の発展を促した。

こうした解説から見出せるのは、製作本能の自己汚染による「金銭的管理」を指向する「企業」が、有用なものを効率的に作り出す「製作」を指向する「産業」を促進させることになる、という点である。これは、金銭的管理を指向する「企業」を促進させる製作本能の自己汚染も、結果的には産業技術の発展に役立った、と捉えることができる。つまり、製作本能とその自己汚染の同時的発現が、社会全体に「製作」に有利な「生産的制度」を生み出し、それが産業技術の発展を促した、と解釈することができる。

しかし、こうした解釈はヴェブレンの表面的な解釈に過ぎない。というのも、製作本能とその自己汚染の同時的発現が産業技術の発展を導いたならば、製作本能とその自己汚染は、どのように発現することで、事物を「事実即した」理解を促進したのかについて、何ら明らかにされていないからである。つまり、既存の解釈は、単に、同時的に発現した結果、生産に有利な生産的制度が促され産業技術が発展したとの主張に留まり、製作本能とその自己汚染の同時的発現が、ヴェブレンのいう「事実即した」理解の促進にどのように関わっていたのかについて、何ら提示されていないのである。

そこで本稿では、ヴェブレンの『製作本能論』の第6章「手工業の時代」（“The Era of Handicraft”）の前半部分（Veblen 1914, 231-266 / 訳 192-217）に的を絞り、この問題を再検討する。ヴェブレンはここで、手工業の時代、製作本能とその自己汚染の同時的発現が、「事実即した」理解を促進することで、産業技術の発展が実現したことを主張しているからである。この『製作本能論』の第6章前半部分は、ヴェブレンが、近代の資本主義体制の出発点として、手工業の時代の産業技術の発展過程を製作本能の視点から論じた箇所である。独占段階に突入したアメリカ資本主義体制を研究対象としたヴェブレンにとって、資本主義の出発点を製作本能の視点から詳しく論じたこの章は、きわめて重要な個所であったと考えられる¹¹⁾。それゆえ、この章を再検討することは、ヴェブレン経済学のさらなる解明に繋がると考えられる。そこにこの章を再検討する意義がある。

昨今、進化（論的）経済学や制度を重視する経済学の研究に対する関心が高まっている。その中で、

11) 稲上は、次のように述べている。「この作品『製作本能論』——引用者——では手工業時代に強いフットライトが当てられている。その経済史的・文化史的意義はきわめて大きいというのがヴェブレンの判断だった」（稲上 2013, 380）。

進化論的経済学を提唱し、一般的にアメリカ制度学派の創始者とされるヴェブレンは、現代でもなお取り上げられ研究が行われている (ex., Almeida 2015, Hodgson 2007, 2008, Patsiaouras and Fitchett 2009). それゆえ本稿において、ヴェブレン経済学を再検討し、ヴェブレンの再解釈を提起することは、現代的意義があるといえよう。

本稿の流れを予め述べれば次のようである。次章では、手工業時代はどのような時代であったか、そしてその時代に本来の製作本能および製作本能の自己汚染がどのように発現したかを論じる。第3章では、手工業の発達と手工業の訓練を通じて、近代物質科学および近代科学が生成してくる過程を論じる。そして第4章では、製作本能の自己汚染がその発現を通じて近代科学や近代物質科学を作り上げ、それが産業技術の発展を導いたことを論じる。最後に第5章では、これまでのヴェブレンの議論を総括し、ヴェブレンが製作本能とその自己汚染の見地から産業技術の発展をどのように究明したかを明らかにし、ヴェブレン研究に新たな視点を提起する。

では、章を改めヴェブレンの議論を順次追っていくことにしよう。

2. 手工業の時代と製作本能

2-1. 手工業の時代

ヴェブレンはまず、手工業の時代はどのような時代であったかを議論する。

ヴェブレンによれば、キリスト教民族は、中世の終わりまでには、略奪的な特徴を有する暗黒時代から財産権に基づいた半平和的な時代への移行を成し遂げた¹²⁾。その移行には、手工業、巡回商業、産業都市の成長が伴っていた。この時代は、手工業が中心であり、職人精神が成長した「手工業の時代」である。この時代は、産業技術が成長し、やがて機械制産業の時代に移行する (Veblen 1914, 231-232 / 訳 192-193)。

手工業時代は当初、資力に乏しく暮らしを立てるために独立して働く職人で構成されていた。手工業ギルドは、そうした職人の生活の原理により作られた。小規模商業も生活のために働くという同様の原理で運営された。やがて、資力のある商人が現れた。それに伴い、利潤のための投資が手工業体制でも採用されるようになった。仕事の特化、すなわち分業が増加した。生産設備の規模も大きくなった。資力のある親方職人も、資力のない職人を雇用した (*Ibid.*, 232-233 / 訳 193)。

ヴェブレンによれば、手工業時代全体を通じて、生産物は貨幣で表示された価格で販売されるようになった。手工業時代が始まった頃は、有能な職人は公平な生活が認められた。価格は労働費用に基づくものであると考えられ、そのもとで「適正価格」が決められ維持された。しかし、交易と市場がさらに発展すると、その考え方は変わった。価格は、近代と同じように、生産物がどれだけ売れるかで決まると考えられるようになった (*Ibid.*, 233 / 訳 193-194)。

手工業の時代が終わる頃には、職人はすでに親方職人や商人の下で雇用されるようになった。そのような状態を導いたのは、産業技術の発展である。産業技術が成長したことで、以前と比べて、道具や生産設備の量が増え、費用もかかるようになったのである。この産業技術の成長が職人の働き方を変化させた。こうして自己の利益獲得のために生産を行う事業者が次第に中心となった (*Ibid.*, 233-234 / 訳 194)。

¹²⁾ 略奪的文化段階から半平和的文化段階への移行については、高橋 (2010) を参照されたい。

ヴェブレンは、こうした手工業の時代に、製作本能はどのように発現するのかを議論する。節を改めてみていこう。

2-2. 手工業体制と製作本能

ヴェブレンは、手工業体制下で製作本能は社会における生活全体に影響を及ぼし、人々の思考習慣すなわち制度を形成する、と主張する。ヴェブレンは次のように述べる。

「手工業体制では、またこの体制が状況を形作っている限りでは、製作本能は再び、様々な要素の中で支配的な地位を得る状態となる。日々の生活の訓練（the discipline of dairy life）を作り上げ、そして人々の思考習慣に独特な傾向を与えることになる」（*Ibid.*, 234 / 訳 194）。

では、この時代、製作本能はどのような日々の生活の訓練を作り上げ、そしてそれを通じてどのような制度を形成するのか。ヴェブレンによれば、手工業時代における中心的な存在は独立した職人である。手工業とは、技能、独創力、勤勉さを備えた訓練された職人そのものを表す。職場以外での人間関係も、習慣によって、自身の目的を各自成し遂げる独立した職人同士の関係として考えられる。職人は自身の身体を頼りに働く独立した存在であり、家柄などが職人の仕事に価値を加えることはない。職人は、相続財産や特権、地主や借地人に縛られることもない。職人は、道具一式を持ち、目前にある仕事を遂行し、物を役立つように作り上げる創造的主体である。この時代はこうした職人が中心の社会である。それゆえ、この時代の技術的な問題をどう把握し考えるかは、職人が作り上げる思考習慣が規定することになる。こうした手工業の訓練（the discipline of the crafts）は、職人が努力して成し遂げるという観点から機械的な事実と過程を理解させるように促す。事物を考える際、何の力が利用可能でその力をどのように利用するかは、職人の腕の力や動きとして考えられる。職人が利用する道具も、職人の手作業のように理解される。道具は、職人の手作業のような働きをする労働節約の仕掛けや装置として考え作られる（*Ibid.*, 234-236 / 訳 194-196）。こうしたことは、純粋な製作本能の発現によるものである。ヴェブレンは、次のように述べる。

「産業に関わる作業と器具を考えるさいのその様式は、同時に、本来の製作本能が与える人間の本来の性癖と密接に一致する。その傾向は、手工業体制下で、日々の決まった事柄の絶え間ない流れが育み、成長して当然の事柄となる。そして、人間が産業に関わる事柄をどのように考えるかを継続的に方向づける。さらに、手工業の時代が工場体制や大規模な機械産業に席を譲った後でさえも引き続き方向づけた」（*Ibid.*, 236 / 訳 196）¹³⁾。

このようにヴェブレンによれば、手工業の訓練は、機械的な力や過程を、筋肉的な力と職人が行う操作のように理解することを強制する。この訓練は、手を使う労働に携わる階級に影響を与える。しかしその影響は、手工業に直接、間接に関係を持つ個人や階級すべてに及び、そして社会全体に浸透する。この訓練は、手工業時代の制度を形成するさい、圧倒的な影響力を及ぼす（*Ibid.*, 237-238 / 訳 196-

13) ヴェブレンに従えば、原動機が出現し、手工業時代の筋肉的な製作から離脱した後でさえ、溶鉱炉、運河、街道、蒸気エンジン、電信設備は「労働節約の仕掛け」と分類されてきた（Veblen 1914, 236 / 訳 196）。

197)¹⁴⁾.

ヴェブレンは、手工業の時代、本来の製作本能が支配的となるとする。製作本能はその発現を通じて手工業の訓練を導く。手工業の訓練は、事物を職人が有用なものを効率的に作り上げるような過程として理解するように促す。産業や器具を考えるさいにも、同様の理解の仕方を与える。手工業の訓練は、こうした理解の仕方を社会全体に浸透させ、その制度の形成を導く。

このようにヴェブレンは、本来の製作本能が支配的となると主張するが、しかし、この時代製作本能は自己汚染するとも主張する。節を改め見ていこう。

2-3. 手工業体制下における産業技術と製作本能の自己汚染

ヴェブレンはまず、産業技術はどのように発展するかを議論する。ヴェブレンによれば、技術的な経験を積み重ねるだけでは、産業技術の改善にはつながらない。近代後期に見られる機械的な技術では特にそうである。近代後期の機械的技術を考える際は、非人格的で、機械的、盲目的な機械過程を考えることが求められる。この時代の技術で事実間の繋がりは、量、速度、ひずみ、水力、圧力という機械過程の論理で理解されるからである。それは、手工業の訓練が与えるような、事物を職人のように捉えることではない。事実が目的論的に理解されたり、個性が与えられて理解されたりすると、その事実は機械過程の論理の下では利用できない。あるいは扱いにくい。しかし、新しく手に入る事実はすべて、擬人論的な個性が与えられている。この事物を擬人論的に理解することは、慣習が事実を機械的に理解することを促す場合には、やがて衰えることになる。つまり、事実を以前と比べ客観的に理解するようになる。したがって、蓄積する事実は、産業技術に役立つためには、慣習によって擬人論的に理解されていない状態でなければならない。事物を理解するさい、擬人論的な理解がどの程度取り除かれているかが、事実が産業技術に利用可能かを決める。擬人論的に理解されていない事実が増えるほど、つまり機械過程が与える訓練が増えるほど、機械的事実を技術的に利用する進歩の速度が速い (*Ibid.*, 241-242 / 訳 198-199)。

ヴェブレンはこのように、産業技術の発展のためには、事実が擬人論的に解釈されないことが重要であると主張する。しかし、とヴェブレンは次のように続ける。

「しかし、産業の決まり切った作業や機械過程の利用、および人間が自由にできる近代の機械産業による財貨の産出の他にも、多くのものが慣習を構成するのに入り込んでいる。……製作の感覚は、なおも種々の慣習的規範や行為原則が課す抑圧的な制限の下で作用しているその他の衝動的な人間性の要素による汚染にさらされている。さらに、製作の感覚は、職人らしい性向という見地から経験の

14) ヴェブレンによれば、19世紀、産業で用いられる機械装置は習慣的に「労働節約の仕掛け」と言われてきた。そう理解するのは当初、肉体的な操作を通じたものだけであった。しかし、肉体的な領域から離れてもなお、そうした解釈が適切であり人々を満足させるものとされた (Veblen 1914, 236 / 訳 196)。

さらに、ヴェブレンによれば、この習慣的な精神的態度は、やがて生成してくる機械時代の技術に重大な影響を与える。機械的な発明や工夫は、手工業の時代から産業革命を通じて大規模産業体制に至るまで主役を演じるが、それは手工業にその起源の痕跡がある。機械制産業の時代の初め、その工夫は人力で成し遂げる動作を機械的手段で成し遂げるための工夫である。それは職人らしい効率を促進するため工夫された労働節約の仕掛けである (Veblen 1914, 238 / 訳 197)。

さらに続けてヴェブレンは、労働節約の仕掛けに関するさらなる詳しい議論を蒸気機関の発明を例にとり説明している (Veblen 1914, 239-240 / 訳 197-198)。

事実を擬人論的に解釈するという点で自己汚染に従属しているのが常である」（*Ibid.*, 242 / 訳 199）。

ヴェブレンは、このように産業技術の発展には事物の擬人論的理解は妨害となると説明するが、しかし、製作本能は自己汚染し、事実を職人のように擬人論的に理解する、と主張する。さらにヴェブレンは、この時代、製作本能の自己汚染が、効果的に広がると主張する。

「この製作の感覚の自己汚染が効果的に広がることについて、次のことを思い出すことが適切である。それは、職人精神が階級内で広がり、それゆえその階級意識から生まれる自己満足という強い感情が手助けすることである」（*Ibid.*, 242-243 / 訳 199-200）。

ヴェブレンはこのように述べて、この状況に至る理由を続けて説明する。手工業の時代には、職人が自ら社会で有用な成員であると評価するという強い階級感情が流布している。職人は、人間に役立つ物の生産に携わっていない他の階級と自らを区別する。職人は効率性と有用性を表した典型的な存在である。その他の階級はそれ相応に立派ではあるが、職人のような効率性が欠けている。熟練した職人が効率的であることは、手工業社会では明らかである。手工業の時代では職人が効率的であるという評価がすべての階級に受け入れられるようになった（*Ibid.*, 243 / 訳 200）。

ヴェブレンはこのように、産業技術の発展には事物の擬人論的理解は妨害となるが、手工業の時代においては、製作本能が自己汚染しそれが社会に効果的に広がる、と主張する。

かくしてヴェブレンは、手工業の時代において製作本能とその自己汚染が同時に発現している、と主張する。では、製作本能とその自己汚染の同時的発現は、どのように産業技術を発展させるのか。そこでヴェブレンはまず、手工業の発達とともに現れた小規模商業が作り出す制度について議論する。章を改め、ヴェブレンの議論を追って行こう。

3. 手工業の訓練と近代科学の発達

3-1. 手工業の発達と商業が生み出す制度

事物を職人のように理解することが社会に流布すると、その理解の仕方は、観察された事実すべてを擬人論的見地から解釈することを強めたに違いない。しかし、手工業時代の小規模商業は擬人論的な特徴を有しているわけではない。行商や売買は個人を前面に押し出し、自己本位的感情を刺激し、個人主義的見地から人間や事物を理解することを強調する。しかし、価格が与える事物を数量的に評価する習慣はそうした傾向を有していない。価格が与える事物を数量的に評価することは、手工業時代全体を通じて社会に浸透する。手工業体制が相当に発達したところではどこでも、社会の日常生活は、市場が中心となり価格が与える思考習慣を有するようになる。それは、日常生活に徹底して入り込む。価格が与える事物を数量的に評価する思考習慣たる価格体制が前面に出てくる。取引が増えると、簿記が商人の間で利用されるようになる。市場との関わりが一般的になるにつれて、商業に携わっていない階級でも、正式な計算書を使用しないにしても、初歩的な簿記の考えを熟知するようになる（*Ibid.*, 243-244 / 訳 200-201）。

ヴェブレンによれば、会計業務が与える考え方は、非人格的であり感情的なものではない。人々が簿記の考え方を利用すると、人々は数字とその計算で示された統計という思考習慣を持つようになる。統

計が作り上げる思考習慣は、金銭的な関係を持つ事物や関係をすべて正確に量的に理解することを助長する。会計業務は統計の始まりであり、価格は客観的、非人格的、量的に事物を理解する基準となる。量的に提示できず統計的に操作ができない事実は、こうした評価の方法に合わないために、事実であると認められなくなる。その事実は現実性がないとして説得力を失うか、さほど現実的ではないと見なされるようになる。事実としての価値さえ否定されるかもしれない (*Ibid.*, 244-245 / 訳 201)。

ヴェブレンは、価格体制は近代に現れる機械技術の興隆と深く関係していた、と主張する。価格体制は、価格に関する会計業務を通じて工業の分野に統計的な計算の方法を提供しただけではない。価格体制は、事物を擬人論的に理解せず、価格や会計が与える訓練を通じて、事実を機械的に理解するように導いた。価格体制は、機械的事実から職人を転嫁させて理解することを取り去った最も強力な要因であった (*Ibid.*, 245 / 訳 201-202)。

このように手工業の発達とともに生成してきた小規模商業は、価格体制と会計や統計を生んだ。それは、事物を量的にそして客観的に理解することを促した。ヴェブレンは次に、この理解の仕方が、手工業が発達したところで見られ、そこに近代物質科学の発展が進行していったことを議論する。節を改めて見ていこう。

3-2. 手工業の発達と近代物質科学の発展

ヴェブレンによれば、観察された事実を量的にかつ客観的に表現することは、近代初期の産業技術にはさほど見られない。最も顕著に見られるのは、手工業時代後期に機械制産業の拡大とともに発達した物質科学の成長においてである。物質科学は、機械制産業の技術と密接に関係している。中世の思考習慣から近代の思考習慣への移行を最も明確に示しているものこそが、物質科学の発展である。事実即ち理解とその結果として達成される物質科学は、手工業が十分に発展したところではどこでも直ちに顕在化した (*Ibid.*, 246 / 訳 202)。

ヴェブレンによれば近代で物質科学の成長が最初に始まったのは、商業が発達していたイタリアであった。イタリアで商業が発達していた時期は、産業と商業が地中海沿岸で最も繁栄した頃であるが、この時期はすでに人々の関心が物質科学よりも横暴な政治や宗教に向けられた時期でもあった。教会と国家権益が前面に押し出され、科学、産業、やがて商業までも衰えた。この後に手工業が発展したのは北海沿岸の低地帯と南ドイツであった。商業も大きく発達し、営利企業の時代となった。しかし、王侯の小競り合いは社会の資源を使い果たし、この時代に手工業を牽引した産業の将帥 (captains of industry) の信用も無くなってしまった。宗教的争いも発生し、産業と商業を衰退に導いた。中央ヨーロッパもイタリアや低地帯とほぼ同じ道を歩んだ。この間に、オランダ人、南ドイツ人、フランス人の学者が物質科学を再び前進させた。しかし、王侯の政治や戦争、宗教的争いは物質科学を迫害した。戦争や宗教的争いは、産業と科学の発展を停止に追い遣った (*Ibid.*, 246-248 / 訳 202-203)。

そこで最終的に近代物質科学の成長を先導するのは、イギリスである、とヴェブレンは主張する。イギリスは、西欧型の文明が成長するための要素において、大陸諸国と異なっていなかった。イギリスは、人種性格、自然資源、文化において、大陸諸国と比べてなら特別な点も不利な点もない。イギリスが他とは決定的に異なるのは、この国が島国であることである。近代初期では、文化および人口の面でも大陸と比べて著しく遅れていた。技術も遅れていた。イギリスは、手工業時代初期、技術を大陸諸国から借用し模倣していた。商業の発展も、技術と同様、大陸と比べ遅い。それゆえ、大陸での営利的な企業による商業の発展に関わっていない。しかし、イギリスは、他の国の技術を借用し模倣する

ことができた。それが、その後の短期的で急速な産業の発展と拡大に繋がった。結果的にイギリスは、大陸諸国のように産業の衰退には至らなかった。さらにイギリスは、手工業時代の末期、大陸諸国で行われた君主による政治的な紛糾状態の外部にあり、長い国際的戦争に決して関わらなかった。かくして、イギリスの手工業時代は他とは異なる結果となった。つまり、イギリスの手工業時代は産業革命で終わることになった。手工業時代の終焉は、イギリスでは崩壊ではなく技術革命によりもたらされた (*Ibid.*, 248-251 / 訳 203-206) ¹⁵⁾。

ヴェブレンは、手工業の発達とともに近代物質科学を先導したのはイギリスであると主張する。そしてヴェブレンは、手工業の時代が生んだ近代物質科学が、手工業の訓練の所産であるという議論に移る。節を改め見ていこう。

3-3. 手工業の訓練と近代科学の萌芽

近代物質科学は、手工業時代の産業技術の状態と密接に結びついている。それゆえ、近代科学は、手工業の訓練が作り上げる思考習慣すなわち制度である。ヴェブレンはこのように主張し、近代科学が手工業の訓練によって生まれたことをさらに掘り下げて検証しようとする。そのためにまず、ヴェブレンは、手工業時代の科学的研究がどのような状態であったか、そしてどのように進歩したかを追跡する (*Ibid.*, 253 / 訳 207-208)。

ヴェブレンによれば、近代科学が成り立つための前提条件と近代科学の固定的な思考習慣たる先入観は、中世後期のスコラ哲学から引き出された。それは神学的な特徴を帯びていた。その先入観は、主人と奴隷との関係が形成する文化の中で生まれた神学が作り出した。その先入観は、非常に擬人論的な特徴を有している (*Ibid.*, 253-254 / 訳 208)。しかし、とヴェブレンは続ける。

「しかし、それは製作に関わる擬人論ではない。少なくとも、製作の感覚がこの時代の人々と比べて原始的な人々の持っていた擬人論的解釈に与えた素朴な形の擬人論ではない。当然のことだと考えられるが、製作の感覚は、そのまま存在しており、……中世の知的生活の中でずっと直接的に表出している。しかし、同じように当然のことであるが、一連の厳格な支配と隷従が進める文化的状況で、純粋な製作の感覚は、それが促進されることで、何が正しいことか、何が良いことかという究極的な判断を与えない」 (*Ibid.*, 254 / 訳 208)。

ヴェブレンは、このように中世における本来の純粋な製作本能とその自己汚染の発現の仕方について議論する。この時代の製作本能の自己汚染は、職人のように事物を作り上げるという「製作」に関わる擬人論ではない。さらに本来の純粋な製作本能は後退している。このような状況の中で、中世の思考習慣は、効率的に有用なものを作り上げるという本来の製作本能が導く思考習慣たる「製作の先入観」にどのように変化していったのか。ヴェブレンの議論を追っていこう。

ヴェブレンに従えば、中世での信仰は、俗事で支配していた組織と統制方法と同じく、極度に権威的で威圧的な様相を呈していた。近代に移行する時期でも、キリスト教国の信仰は、恐怖を覚える服従と専断的な権威の信仰であった。もちろん、穏やかな特徴のものもあった。しかし、その穏やかな特徴の

¹⁵⁾ ヴェブレンは、島国で王侯や君主らによる戦闘に比較的関わっていないという意味で孤立していたイギリスに似た環境にあった国が、なぜイギリスと同じような道を辿らなかったか、ここで続けて詳しく論じている (*Veblen* 1914,251-253 / 訳 206-207)。

ものでさえも、独裁者による権威と卑屈な服従の信仰であった。この信仰は、牧畜にその起源があり、略奪的な特徴を有していた。略奪的な特徴は、封建的なヨーロッパの状況に完全に合致する (*Ibid.*, 254-255 / 訳 208-209)。

ヴェブレンは、宗教信仰はゆっくりと変化する、と主張する。信仰は、物質的な環境が変わっても、計画的かつ統制的に是正されることはない。教義が守られるか廃れるかは、生活習慣が作り出す広く行き渡っている思考習慣と調和するかにある。新しい信仰に転換することがなければ、信仰の広範囲に渡る変化は、少しずつ回りの変化に合わせてながら再び構築されていくのが通常である。中世の信仰が、後の近代における信仰や神に対する考え方に次第に変わっていった動きは、そうした緩やかな動きであった (*Ibid.*, 255 / 訳 209)。

ヴェブレンは、神学をどのように考えるかという精神的な態度は、手工業の生活に断続的に慣化されて次第に変わっていった、と主張する。信仰の基本原則は手工業体制の精神を吹き込まれた。神聖キリスト教国の概念が有する支配と従属が導き出す固定的な先入観は、効率的に有用なものを作り上げるという思考習慣たる製作の先入観に少しずつ変化していった。この間、手工業の訓練が、神はどのようなものかという考え方を、物を作り出すという製作が与える思考習慣と調和するようにゆっくりと変えていった (*Ibid.*, 255-256 / 訳 209)。

こうしてヴェブレンは、手工業が与える訓練が進行していく中で、中世の哲学と宗教信仰から引き出される先入観が「製作の先入観」に漸次変化したと主張する。そうしてヴェブレンは、手工業の訓練が、神の捉え方を変え、そして摂理の秩序や「自然の秩序」(“Order of Nature”)が生成される、と主張する。ヴェブレンの議論を追ってこう。

3-4. 手工業の訓練と近代物質科学の成長

ヴェブレンによれば、中世の神学、哲学、科学では、真理の探究は大抵の場合啓示された真理に遡る。つまり、「神は何を定めたか」という問いに遡る。手工業時代が進むとこの問いは、「神が作り与えたものとは」となる。手工業時代初期に、神の聖なる摂理の創造的な聖務が無視あるいは軽視されたわけではない。手工業時代後期でも、神の主権が否定されたり疑問を持たれたりしたわけではない。手工業時代の初期では、摂理の探究はすべて最終的には神の宗主権や神の法令の探究であった。後期でもその探究は、手工業時代の終焉期に見られるように、神の創造的聖務とその創造的計画がどのような筋道であるかを示すことであった。神は天上の主であり、神が、至高、至尊など伝統的な尊称で誉め讃えられなくなったわけではない。ただ、神は創造主、つまり超自然的な職人として崇められるようになったのである。手工業の訓練が作り出す思考習慣が、聖域と神威の勧告に入り込んだのである (*Ibid.*, 256-257 / 訳 210)。

ヴェブレンに従えば、科学の研究の対象は、こうした経緯と同様に、スコラ哲学の最盛期には真正な神の定めまで遡った。しかし、手工業時代の訓練の下では、科学的研究は作用因を問うことになる。この敬虔な時代で作用因は、造物主が有する創造的能力である。この時代の初期では、知識が会得される際の体系化の論理は、神の栄光にまで遡ることができる包摂の論理であった。真理の基準は、いわば半神聖なアリストテレス哲学の事物の体系で強化された神の啓示の言葉の基準である。それは、力と属性という点で階層的に調和するという考え方である。その考え方は、封建主義体制下の権力と威厳の委譲に似ており、それを連想させる。この時代の後期となると、神の栄光が人間の利益に変わる。この時期考えられることは、事実と神の意志という想像的な要件とを一致させることではない。人間が使用する

際、事実が有用かどうかということになる。手工業が成熟すると、「摂理の秩序」は人間の利益に心を向ける慈善心に富む創造主による秩序となったのである（*Ibid.*, 257-258 / 訳 210-211）¹⁶⁾。

ヴェブレンは、手工業時代の終焉までには、この摂理の秩序は「自然の秩序」となった、と主張する。自然の秩序がその働きを通じて最終的に生み出すのは人間にとって最も幸福な状態である。それは熟練した職人が役に立つ優れた財貨を生み出すことときわめて似ている。この時代で神は、それがたとえ製作的で創造的な働きをする神であっても、背景に追い遣られている。自然の秩序は、達成されるべき有用な目的に向けて活動する熟練した職人らしく働く、と考えられるようになる。科学的研究は、この時期、決まった時間で完璧な仕事を達成する職人が体现するような自然の力による物質的な世界の規則を研究するものとなる。自然は、事物を作り上げるという製作的な特徴のゆえに尊敬される（*Ibid.*, 258-259 / 訳 212）。

ヴェブレンによれば、この職人のような自然は、物を作るという製作的な方法でその目的を果たす。それゆえ、人間は自然の働きを注視し、合理的な常識を用いて観察された事実を解釈することで、自然の働き方や自然が成し遂げる仕事の手順の規則を学ぶことができる。自然がどのような手段を用いてどのような道筋で目的を達成するかという点で合理的であることは、この時代では当然のことだからである。この状況は、利用しうる手段を用いて達成すべき目的を、訓練された技術で仕事をやり遂げる職人にきわめて似ている。完璧な職人のように、「自然は決して間違わない」、「決して飛躍しない」、「決して何も無駄にしない」、「決して完璧な仕事以外は何も生み出さない」（*Ibid.*, 259-260 / 訳 212）。

ヴェブレンに従えば、自然はその働きを通じて完璧な結果を生み出すが、それは自然法則における原因と結果という秩序が作用することによって実現される。因果関係のような事実は立証されていないし立証できないという意味では、因果関係の原理あるいは「法則」は、形而上学的な仮定である。後の心理学者にとっては当たり前のことであるが、因果関係の真相を観察した者はいない。しかし、因果関係とはどのようなものかと疑う者はこの手工業時代には現れない。この時代では、自然の力が自身の目の前に現れる結果を作り出していると考えすることは当然のことであり、常識だからである。観察者が見るものは、ある結果を生み出す原因である。観察者が観察された現象に因果関係を転嫁させることは当然のことなのである。観察者が転嫁させているという感覚はまったくない（*Ibid.*, 260 / 訳 212-213）。

このようにヴェブレンは、手工業時代の手工業の訓練が科学的研究に変化を与えるとともに、事物を原因と結果すなわち因果関係において考察することをもたらしたとする。そこでヴェブレンは次に、製作本能がその自己汚染を通じて因果関係を考察する近代科学を生んだ、という議論に移る。章を改め見ていこう。

4. 製作本能の自己汚染と近代科学

ヴェブレンによれば、擬人論的な特性を転嫁しなければ、観察は、単に現象が連続的に並んでいるに過ぎず、それは何の目的にも役立たない。しかし、実際には、手工業時代初期の科学的研究は、現象が単に並んでいることを研究しているわけではない。この時代の後期であっても、近代科学は、想像による因果関係に依らずに、単に現象が連続的に並んでいるという観点から何らかの結果に到達したことはない。近代科学が生まれた頃、統計的論証が次第に増加し、それに依存するようになる。物質科学では、

¹⁶⁾ これは「人間中心主義」(humanism) と呼ばれている、とヴェブレンは述べている (Veblen 1914, 258 / 訳 211)。

繊細な測定、計算、精密な計器に依存するようになる。しかし、測定や統計的計算で表現されている事実は、解決が求められている問題について、想像的に分かっている因果関係に基づき、問題解決という目的のために選ばれた事実である。つまり、測定、計算、そして精密な計器で表現される事実が、原因と結果の議論の中で利用されるのである。そうして得られた事実の中に、研究者が想像する原因から結果までの過程を、ないしはその逆を見つけ出すことができる場合にのみ、その事実は目的にとって役に立つとされるのである (*Ibid.*, 260-261 / 訳 213-214)。

さらにヴェブレンは、次のように主張する。原因と結果は、どう観察しても互いに作用しているとは言い難い現象間の想像的な関係である。それは、観察による事実ではない。そうではなく、転嫁による事実である。現象が互いに作用する関係にあると考えることが、因果関係の実体である。原因が結果を作り出すという考えに依存すること、つまり想像的な事実について形而上学的に仮説を立てることは、近代科学の顕著な特徴である (*Ibid.*, 261-262 / 訳 214)。

こうした因果関係を考察する近代科学は、手工業の訓練が生んだものである、とヴェブレンは主張する。近代科学は因果関係の仮説を立てることに依存している。そればかりでなく、近代科学の特徴である原因が結果を生み出すという考え方を示す因果関係の概念は、手工業の訓練が作り出したことは疑いようがない。(*Ibid.*, 262-263 / 訳 214)。ここでヴェブレンは、次のように述べる。

「近代科学に固有な特質で、特に近代初期に見られるようになる特質がある。それは、因果関係の概念が製作という観点からもたらされることである。もっと実体に照らして言えば職人精神という観点からもたらされていることである。おそらく、まったく議論する必要もない論点であるが、因果関係を読み取ることは、一般的に製作の感覚のある特殊な発現である。しかし、製作の感覚は、その純粋な発現で、外見上の単なる熟練職人が持つ手際の良さだけではない何かを担っている。近代でなくとも、つまり、近代ではない文化的(技術的)状況の下でも、製作の感覚は、実際、この時代と比べ偏見のない、少なくとも自由な発現から因果関係の概念を生じさせる」(*Ibid.*, 263 / 訳 214-215)¹⁷⁾。

このようにヴェブレンは、製作本能の特殊な発現、つまり自己汚染の発現が因果関係の概念を生じさせると主張する。さらにヴェブレンは、本来の製作本能も、職人に体現されるような手際の良さを表現するだけでなく、有用性を考察し自由に発現するさい因果関係の概念を生じさせるとする。

こうしてヴェブレンは、近代科学では、事物を因果関係で捉え、数量的に示すことが求められる、と主張する。近代科学の研究において、事物を因果関係で捉え物理的に数量で示されない説明は、暫定的なものであり、物理的に示されなければならないものとして捉えられるだけである。近代科学で認められる説明は、接触と圧力を通じて事物の構成の変化をもたらす物質と運動によって事物を明らかにすると思えるような説明である。因果関係は、手で行う仕事として理解されるのである。近代における科学者を満足させるためには、生理学的あるいは化学的な説明は最終的には物理学で作り直さなければならない (*Ibid.*, 264 / 訳 215)。

かくしてヴェブレンは、手工業の時代、製作本能が導く訓練が産業技術の成長をもたらした、と主張

¹⁷⁾ ヴェブレンはここで、原始未開の段階および古代の人々の間での原因と結果の考え方について論じている (Veblen 1914, 263-264 / 訳 215)。

する（*Ibid.*, 265-266 / 訳 217）.

以上が、ヴェブレンの議論の骨子である。

5. ヴェブレンの製作本能論と産業技術

これまでヴェブレンの議論を追ってきた。そこから見出せるのは、ヴェブレンが製作本能とその自己汚染の同時的発現により手工業時代の産業技術の発展を追究している点である。その視点から、ヴェブレンの議論を、再度検討を加えながら見てみよう。

ヴェブレンは、手工業の時代がどのような時代であったかという議論から始める。中世の終わり頃にはキリスト教民族は、略奪的社会から財産権が認められた社会への移行を成し遂げた。それに伴い手工業が発達した。この手工業の時代は、独立した職人が中心である。その職人と同じように独立し生活する商人は商業を発展させた。生産物は貨幣で表示された価格で販売された。手工業時代の後期には、産業技術の発展により生産に用いる器具や設備が増え生産のための費用が依然と比べ高額となったため、資力のある親方職人や商人が職人を雇い入れるようになった。こうした手工業の時代は産業技術が成長した。この時代は、やがて機械制産業の時代へと移行する。

手工業の時代は、純粋な製作本能が支配的な地位を得て日々の生活の訓練を通じて制度を形成する。手工業時代の中心的存在は職人である。手工業は有用なものを効率的に作り上げる職人そのものを体現する。この時代の日々の生活の訓練は、手工業の訓練である。手工業の訓練は、事物を職人が有用なものを手作業で効率的に作り上げるような過程として理解することを促す。職人の道具も職人の手作業のような働きをするものとして考えられる。手工業の訓練は、事物を有用なものに効率的に作り変えるという思考習慣を形成する。それは、本来の製作本能の特性と一致する。製作本能は手工業時代全体を通じて手工業の訓練を導く。それが社会全体に浸透する。この点について、クリスチャン・コーズ(Christian Cordes)は次のように述べる。

「ヴェブレンの見解では、手工業産業は手作業で製作するという観点から機械的な力と過程を習慣的に理解することを強制する。彼の主張によれば、技術的にこの時代は製作本能がこれまでにないほど前進し成長することを特徴とする。……手工業産業で使用する機械的な道具は、手作業の労働を手助けするかあるいは簡略化するための仕掛けとして考案された。そうした産業の道具を理解する方法は、ヴェブレンの主張によれば、本来の『製作本能』が与える人間の純粋な特性に遡ることができる」(Cordes 2005, 5)。

ヴェブレンはここで、手工業の時代においては本来の製作本能が発現するが、同時にその製作本能が自己汚染していることを議論する。産業技術の発展のためには事物は、目的論を含んだ擬人論的な観点から理解されてはならず、機械的な観点から客観的に理解されなければならない。しかしヴェブレンは、この手工業の時代においては、製作本能が自己汚染し、事物を効率的に有用な物に作り上げる職人のように擬人論的に理解することを促すと強調する。職人が中心的存在である手工業の時代においては、この製作本能の自己汚染は効果的に広がる。

製作本能の自己汚染が、事物を職人のように擬人論的に理解することについて、J・P・ディギンズ(J. P. Diggins)は次のように述べる。

「ヴェブレンの観察によれば、『製作本能を取り囲む最も妨害的な攪乱は、製作本能それ自体の自己汚染と呼ばれるものである』。この汚染は、自然界を理解するために、そしてそれに働きかけ統制するために、原始人がよく知られた個性的な性質を外的事実に転嫁させるときに起こる。人間は、この擬人論あるいはアニミズムの性向を持つがゆえに、自ら職人らしい性向を外的事物に投射する。その結果、自然界で自ら運動することのない非人格的な現象が人格をそなえた意味を帯びることになる」(Diggins 1977, 126)。

さらにヴェブレンは、手工業の発達に伴う小規模商業の発達が生み出した価格体制や会計の社会的浸透は、事物を客観的、非人格的、数量的に理解することを促したと主張する。ヴェブレンは、価格体制や会計の浸透が「事実に即した」理解を促進することに繋がる、と捉える。

これまでの議論でヴェブレンは、製作本能が手工業の時代にどのように発現したかを追っている。ヴェブレンは、本来の製作本能とその自己汚染が「同時的に」発現している、と主張している。製作本能は、その特性を職人に体现させ、事物を有用な物に効率的に作り上げる職人の作業や道具を生み出すことに貢献する。この点、製作本能は、事物を有用性と効率性の点からうまく利用しようと捉えている。製作本能の本来の発現形態は産業技術の発展に貢献する。しかし同時に、製作本能の自己汚染は、事物を職人のように擬人論的に理解することを促している。つまり、事物に職人を「転嫁」させて理解することを促しているのである。事物に職人を転嫁させて理解することは、事物を擬人論的に理解することであり、それは産業技術の発展には繋がらない。このように製作本能とその自己汚染の同時的発現による事物の理解において、「事実に関する事と転嫁に関する事は、もつれてほどけることなく、ほんの僅かに境界線を越えてははっきりと互いに干渉しながら、常に並存している」(Veblen 1914, 57)。こうした製作本能が手工業の訓練を促し手工業の時代を築き上げるのである。製作本能が導く手工業の訓練は、製作本能とその自己汚染の同時的発現による訓練である、といえよう。

では、こうした製作本能とその自己汚染の同時的発現は、どのように「事実に即した」理解を促進させ、産業技術の発展を導くのか。

そこでヴェブレンはまず、手工業の発達に伴う小規模商業の発達による価格体制や会計の社会的浸透が、事物の「事実に即した」理解を促進させた、と主張する。そうしてヴェブレンは、そうした観察された事実を量的で客観的に事実に即して理解することが、とりわけ手工業時代後期の近代物質科学において進行することを議論する。物質科学は手工業が量的にかつ技術的に発達したところで成長した。多くの国や地域で手工業が発達したが、度重なる紛争等により略奪制度が強化され、手工業は衰退した。ヴェブレンは、島国であるがゆえに大陸の紛争からある程度距離を置き、結果的に近代物質科学の成長を導いたのはイギリスであるとする。

このように、近代物質科学の発達と手工業体制下の産業技術の発達とが密接に結びついている。そこで、ヴェブレンは、この近代物質科学が、手工業体制を規定している製作本能とその自己汚染の導く手工業の訓練によって作り上げられることを論じる。

ヴェブレンは、近代科学の思考習慣は、中世後期の哲学が手工業の訓練を通じて変化し、徐々に現れてきたものであると主張する。中世後期の哲学は神学的な様相を呈していた。この中世の思考習慣は、中世の文化的状況下で形成されたもので、擬人論的特徴を有している。しかしそれは、職人のような製作に関わる擬人論ではない。中世での信仰は、略奪的制度を起源とする封建体制に特徴的な独裁者による権威と服従の信仰である。宗教信仰の教義が守られるかは社会における制度と調和するかにある。手

工業の訓練は、信仰に手工業体制の精神を徐々に吹き込む。やがて、中世で支配的である支配と従属の思考習慣が、手工業時代の物を作る製作の思考習慣に変わった。この手工業時代の制度は、神の考え方を変えた。神は、手工業の時代の製作本能の自己汚染が導く手工業の訓練を通じて創造主、つまり超自然的な職人として崇められるようになる。

科学的研究は、スコラ哲学の最盛期には真正な神の定めまで遡ったが、手工業の訓練の下では作用因を問うようになる。この時代でそれは造物主の創造的能力であった。初期では、知識が会得される体系化の論理は、神の栄光にまで遡ることができる包摂の論理であり、それは封建主義体制下の権力と威厳の委譲を連想させる。やがて後期となると、人間の利益が神の栄光に取って代わる。手工業が成熟すると、摂理の秩序は、人間の利益に心を向ける慈善心に富む創造主が課した秩序として解されることになる。この摂理の秩序は、手工業の終焉までには「自然の秩序」となる。神は製作的で創造的な働きをするが後景に追いやられ、自然の秩序が完璧な仕事をする職人のように考えられるようになる。

このようにヴェブレンは、職人が事物を作るという手工業の訓練が、神の概念や自然的秩序という制度を作り上げた、と主張する。この点について、マルコム・ラザフォード（Malcolm Rutherford）は次のように述べる。

「手工業体制の最初の段階で重要なのは職人が持つ技量である。したがって、『手工業産業の訓練は、手作業での製作という観点から機械的な力と過程を理解することを強制する。』しかし、『職人のような性向という観点から経験の事実を理解する擬人論的な解釈』の傾向がある。これは、ヴェブレンが論じる宗教信仰の展開に関係している。例えば、偉大な造物主としての神の概念や、自然哲学、とりわけ自然法というシステムに伴う自然的秩序の概念の展開、あるいは自然権と自然的自由の原理の展開、とりわけ生産的労働に基づく財産に対する自然権の考えである」（Rutherford 1998, 470）。

自然が完璧な仕事を通じてどのように結果を導くかは、自然法則における原因と結果という秩序が作用することによって実現される。手工業の時代、目前に現れる結果は自然の力が作り出したものと考えられるようになる。現象の中に、原因が結果を作り出すという因果関係を転嫁させるのである。こうした擬人論的な特性を転嫁しなければ、観察は単なる現象の連続であり、何の役にも立たない。近代科学の研究は、想像による因果関係の手助けがなければ、つまり現象の連続のみの客観的見地だけでは、何らかの結果に到達したことはないからである。こうした近代科学の因果関係の概念と因果関係への依存は、手工業の訓練が作り出したものである。

この点について稲上は、ヴェブレンの『製作本能論』の本章を検討している箇所でも次のように述べている。「近代科学の発展は事象をめぐる因果関係の仮説に依存している。この因果関係という概念は手工業の職人精神と密接な関係をもっており、その特別な現れだといってもよい」（稲上 2013, 377）。

ヴェブレンは、こうした現象間に想像的な因果関係という擬人論的な特性を転嫁させるのは、製作本能の自己汚染によるものである、と主張する。ジョン・S・ギャムズ（John S. Gams）は、ヴェブレンが製作本能とその自己汚染を一元論的に展開しているとしたうえで、製作本能の自己汚染が、手工業の時代では、神の概念、造物主、事物の因果関係を作り出すことを、次のように述べている。

「ヴェブレンは、製作本能がどのように展開しどのように表現するかを時代を通じて追跡し、それぞれの発展段階が特有の汚染を生じさせるようであると考える。……手工業の時代では、神は造物

主となり、科学は職人のような先入観を特徴とし、ここでは、親方職人が靴を『作る』のと同じように、原因は結果を『作る』とみなされた」(Gambbs 1946, 36 / 訳 53)。

製作本能の自己汚染は、現象間に想像的な因果関係という擬人論的な特性を転嫁する。そこに、価格体制や会計技術が生んだ測定や計算などが提示する数量的事実が、その原因と結果という現象の連鎖の中で利用されるようになる。

かくしてヴェブレンは、「その〔製作本能の——引用者〕訓練が技術の成長と物質科学の関連分野を導いた」(Veblen 1914, 266 / 訳 217) と主張する。

このようにヴェブレンの手工業の時代における産業技術の発展についての議論は、製作本能とその自己汚染の同時的発現が手工業の訓練を通じて形成する制度体系により展開されているといえる。製作本能とその自己汚染により手工業の訓練を通じて形成される制度体系は、手工業の時代において、産業技術の発展にとって有利な制度体系である。製作本能は、一方で、手工業の時代、その本来の発現形態を通じて、その有用性と効率性を志向するという特性を職人に体現させる。これは、事物をそのままの素材として役立つように効率的に利用しようとする。これが、「事実に即した」理解を促すことに繋がる。他方で、製作本能の自己汚染は、職人のような擬人論的な手工業の訓練を通じて、観察される事実と事実の間に因果関係があるものとして事物を擬人論的に理解させる。これが、事物に職人を「転嫁」させて理解することを促す。この理解の仕方は、職人のように理解するという事物の目的論的理解であり、事物を素材として効率的に利用することそのものに役立つものではない。しかし、事実間に因果関係があると考えさせる点においては、事物をうまく理解することを促すことに繋がる。さらに、製作本能の働きによる手工業の発達は、価格体制や会計の発達を生む。その発達が、事物を客観的に、非人格的に、数量的に理解させることになる。それが「事実に即した」理解を促すことになる。

このように、手工業の時代における製作本能とその自己汚染の同時的発現は、事物を製作するのに有利な制度体系を形成する。製作本能とその自己汚染の同時的発現は、近代科学という制度を作り出し、客観的に数量で測られた事実間を相互に因果関係があるものとして把握することを可能にした。製作本能とその自己汚染の同時的発現は、事物を客観的に数量的な見地から「事実に即した」理解を促進した。その結果、産業技術の発展に繋がった。

以上のようにヴェブレンは、製作本能とその自己汚染の同時的発現が、事物の「事実に即した」理解の促進に繋がったことで、手工業の時代において産業技術が発展したことを究明した。本来の製作本能の発現形態と自己汚染の発現形態は、互いに対立・矛盾する特性を併せ持つが、ヴェブレンはその二つの発現形態を対立物の統一として捉える¹⁸⁾。二つの発現形態の対立・矛盾は、手工業の時代においては表面化せず、むしろ産業技術の発展にとって有利に働くかたちで一致するように作用した。そのことが、「事実に即した」理解を促し、手工業時代の産業技術の発展に繋がった。それが資本主義体制の出発点となった。このように製作本能とその自己汚染の同時的発現の視点から手工業時代の産業技術の発展を

¹⁸⁾ ヴェブレンが製作本能の対立・矛盾する二つの発現形態を対立物の統一として捉えていることについて、佐々野は次のように述べている。「ヴェブレンのいう本能は、つまるところ『製作本能』に収斂し、『収奪本能』〔製作本能の自己汚染形態あるいは略奪本能——引用者〕とは、いわば『汚染』された『製作本能』の別名であった。ヴェブレンが『製作本能一元論者』と言われるゆえんであろう」(佐々野 2003, 93)。これについては、佐々木 (1967, 1998) も参照されたい。本稿では、ヴェブレン経済学がまずもって製作本能とその自己汚染の見地から展開されていることも解明された、といえよう。この点については、佐藤 (2010) および高橋 (2010, 2011) も参照されたい。

捉えることは、ヴェブレンが「企業」による「産業」の支配体制として展開したアメリカ資本主義体制論をさらに解明する鍵となるといえよう。

参考文献

- Almeida, F. (2015) "The psychology of early institutional economics: The instinctive approach of Thorstein Veblen's conspicuous consumer theory," *Economia*, 16(2), pp. 226-234.
- Brette, O. (2003) "Thorstein Veblen's theory of institutional change: beyond technological determinism," *Euro. J. History of Economic Thought*, 10(3), pp. 445-477.
- Cordes, C. (2005) "Veblen's "instinct of workmanship," Its Cognitive Foundations, and Some Implications for Economic Theory," *Journal of Economic Issues*, 39(1), pp. 1-20.
- Diggins, J. P. (1977) "Animism and the Origins of Alienation: The Anthropological Perspective of Thorstein Veblen," in Wood, J. C. (ed.) (1993) *Thorstein Veblen: critical assessments*, Routledge Vol. 3, pp. 308-332.
- Edgell, S. (1975) "Thorstein Veblen's Theory of Evolutionary Change," *American Journal of Economics and Sociology*, 34(3), pp. 267-280.
- Gams, J. S. (1946) *Beyond Supply and Demand: A Reappraisal of Institutional Economics*, Greenwood Press (佐々木晃 監訳, 佐々野謙治, 塚本隆夫 訳 (1988) 『需給を超えて—制度派経済学の再評価—』多賀出版).
- Gruchy, A. G. (1967) *Modern Economics Thought: The American Contribution*, New York, Augustus M. Kelley Publishers.
- Hodgson, G. M. (2004) *The Evolution of Institutional Economics: Agency, structure and Darwinism in American Institutionalism*, London & New York, Routledge.
- (2007) "The Revival of Veblenian Institutional Economics," *Journal of Economic Issues*, 41(2), pp. 325-340.
- (2008) "How Veblen Generalized Darwinism," *Journal of Economic Issues*, 42(2), pp. 399-405.
- Patsiaouras, G. and Fitchett, J. (2009) "Veblen and Darwin: tracing the intellectual roots of evolutionism in consumer research," *Journal of Marketing Management*, 25(7-8), pp. 729-744.
- Rutherford, M. (1984) "Thorstein Veblen and the Process of Institutional Change," *History of Political Economy*, 16(3), pp. 331-348.
- (1998) "Veblen's evolutionary programme: a promise unfulfilled," *Cambridge Journal of Economics*, 22, pp. 463-477.
- Taka, T. (2005) "Veblen's Theory of Evolution and the Instinct of Workmanship: An Ethological and Biological Reinterpretation," *The History of Economic Thought*, 49(2), pp. 32-44.
- Veblen, T. (1898) "Why is Economics not an evolutionary science? in Veblen ([1919] 1990) *The Place of Science in Modern Civilization*, New Brunswick, Transaction Publisher, pp. 56-81 (高哲男訳 (2015) 「経済学はなぜ進化論的科学でないのか」『有閑階級の理論 増補新訂版』講談社, pp. 386-415).
- (1899a) "The Preconception of Economic Science I," in Veblen ([1919] 1990) *The Place of Science in Modern Civilization*, New Brunswick, Transaction Publisher, pp. 82-113.
- (1899b) "The Preconception of Economic Science II," in Veblen ([1919] 1990) *The Place of Science in Modern Civilization*, New Brunswick, Transaction Publisher, pp. 114-147.
- ([1899] 1965) *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institution An Economic Study of Institution*, The Macmillan Company (小原敬士訳 (1961) 『有閑階級の理論』岩波書店, 高哲男訳 (2015) 『有閑階級の理論 増補新訂版』講談社).
- (1900) "The Preconception of Economic Science III," in Veblen ([1919] 1990), *The Place of Science in Modern Civilization*, New Brunswick, Transaction Publisher, pp. 148-179.
- (1914) *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts*, New York, Macmillan. (松尾博訳 (1997) 『ヴェブレン 経済的文明論—職人技本能と産業技術の発展—』ミネルヴァ書房).
- 稲上毅 (2013) 『ヴェブレンとその時代—いかに生き、いかに思索したか—』新曜社.
- 宇沢弘文 (2000) 『ヴェブレン』岩波書店.
- 小原敬士 (1965) 『ヴェブレン』勁草書房.

- (1966)『ヴェブレンの社会経済思想』岩波書店.
- 齋藤宏之 (2007)「ソースタイン・ヴェブレンの製作本能の理論」『経済集志』76(4), pp. 17-28.
- 佐々木晃 (1967)『経済学の方法論——ヴェブレンとマルクス——』東洋経済新報社.
- (1991)「ヴェブレンの製作本能の概念」『制度派経済学』ミネルヴァ書房, pp. 29-48.
- (1995)「ソースタイン・ヴェブレンの制度進化の理論」『日本大学経済学部経済科学研究所紀要』20, pp. 71-82.
- (1998)『ソースタイン・ヴェブレン——制度主義の再評価——』ミネルヴァ書房.
- 佐々野謙治 (1982)『アメリカ制度学派研究序説——ヴェブレンとミッチェル, コモンズ——』創言社.
- (2003)『ヴェブレンと制度派経済学——制度派経済学の復権を求めて——』ナカニシヤ出版.
- 佐藤光宣 (2010)「ソースタイン・ヴェブレンの経済学——その方法論的再検討——」『帝京法学』26(2), pp. 25-79.
- 高哲男 (1996)「ヴェブレンにおける制度進化の理論」『経済学史学会年報』34, pp. 28-39.
- 高橋宏幸 (2009)「ソースタイン・ヴェブレンの本能論の展開」『日本大学経済学部経済科学研究所紀要』34, pp. 21-37.
- (2010)「ヴェブレン経済学における製作本能の展開」『経済集志』80(2), pp. 33-49.
- (2011)「ヴェブレン経済学体系における製作本能の意義」日本大学大学院経済学研究科, 博士学位請求論文.
- (2012)「ヴェブレン経済学における所有権と競争——製作本能の視点から——」『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』15(1), pp. 53-76.
- 田中敏弘 (2002)『アメリカの経済思想——建国期から現代まで——』名古屋大学出版会.
- 塚本隆夫 (1979)「ソースタイン・ヴェブレンと古典派経済学の先入観——とくにアダム・スミスとリカードを中心にして——」『経済集志』49(2), pp. 37-56.
- (1983)「ヴェブレンの経済学批判の基本的視点——その進化論的経済学をめぐって——」『日本大学経済学部経済科学研究所紀要』7, pp. 165-183.
- (1994)「ソースタイン・ヴェブレンと重農主義——ヴェブレンの『精霊論』批判を中心に——」佐々木晃編著 (1994)『制度派経済学の展開』ミネルヴァ書房, pp. 97-125.

本論文は所定の査読制度による審査を経たものである。

採択決定日：28年9月29日

日本大学経済学部 経済集志・研究紀要編集委員会